

会報
33号

函館

函館の歴史的風土を守る会会報
No.33 1989. 9. 15
発行所 函館の歴史的風土を守る会
事務局 函館市五稜郭町43-9
五稜郭タワー株式会社内
電話 (0138)51-4785
印刷所 双葉印刷 電話53-7730番

金森美術館・バカラコレクション

金森商船 社長 渡 邊 恒 三 郎

改装なった旧金森船具店の二階の、上下に開く人の背高以上もある縦長の窓から眼前にひろがる港の景色を眺めていると、祖父の渡邊熊四郎(晩年孝平と号した)が金森洋物店の支店として船用品店を開いた明治11年の頃、そして再三の大火にあい最後にこの場所に父の二代目孝平が建て直した明治44年の頃、港や街は一体どうだったのだろうかと思いにふける。幕末以降国際貿易港として内外の多くの船が出入りし、市民の人達もいち早く外国文化になれ親しんでこられた様子が自然と臉にうかぶ。



和風を遺しながらも全体的には重厚なルネッサンス様式のこの建物も、約80年のあいだの潮風で外側のモルタルや漆喰いはボロボロになってしまったし、また屋根の傷みもひどかった。然し幸にも躯体のレンガ壁はまだ大丈夫との精密診断の結果を聞いていたので、傷み箇所を徹底的に修理し、また内部を思い切ってリモデリングして金森美術館バカラコレクションによみがえらせてもらった。

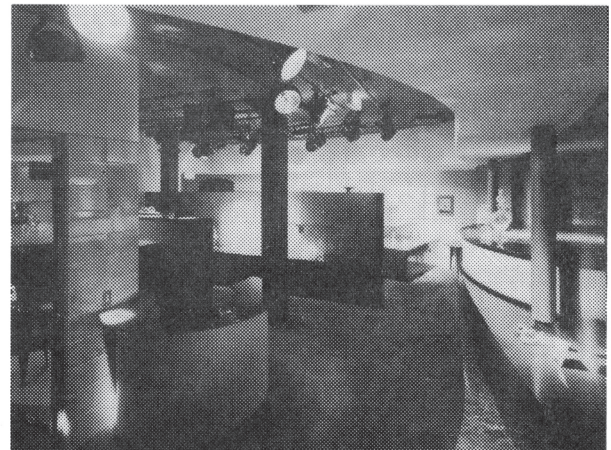
この美術館に展示している作品は、クリスタル芸術の世界的遺産ともいえるパリのバカラ・ミュージアム所蔵の数々の中から、選びに選び抜いた復刻した23点で世界にも限られた数しか存在していない貴重なコレクションである。

そもそもこれら23点はいづれも、バカラ社が1764年創立して今日まで225年の歴史のなかでも、クリスタル分野の最高峰との名声を確立した時代のものである。これも同社が、完璧性と巧緻な技術を極限

まで追求し芸術性をもった奥深い美しいクリスタルを作りつけたからであり、シャルル10世、ルイ18世ほか各国の位高い人達の信頼と賞讃に浴し、いつしか「王者たちのクリスタル」と呼ばれるにいたった。

この栄光の余譜を今に語り伝える作品の復刻にあたっては、長年に亘り培われ受け継がれてきた同社の技術の限りが尽され、M・O・F(フランス最優秀職人)の称号をもつ人達が不備、妥協を一切ゆるさない厳しさのなかで復刻と検査が行われ月に二品しか出来なかった作品もあるという。美と伝統に対する彼等の情熱と誇りがうかがえる。

いま23点のバカラ・ミュージアム・コレクションの復刻品全部が、東京でもなくニューヨークでもなく、この函館で初めて公開され、多くの方々にその優美にして荘重な至上の輝きを觀賞していただけることは本当に嬉しいことである。



これも一重にバカラ・パシフィック社の深い理解と大きな支援があってこそとお礼の言葉もない。またそのかげには、函館の市民の皆さんが一世紀以上も前から海外諸国の人達と交流し、世界の美を愛し、自らは多くの文化的遺産をしっかりと護りつづけてこれらたことが高く評価されたからであろう。

最後にこの景観形成指定建築物を見事に蘇らせて下さった(株)近藤総合事務所、並びに清水建設(株)の方々にも感謝したい。

ズドラーストヴィチエーナホトカ!

元町倶楽部 村岡武司

1859年というペリー提督が日本にやって来た5年後のことである。

ロシアの探検船、その名もアメリカ号というのだが、シベリア総督ムラビオ一行を乗せて未知なる沿海州の静かな湾の奥に船を進めた。悪天候を避けるためと言われているが、それ以来その湾はアメリカ湾と呼ばれその場所はナホトカと呼ばれるようになった。

ナホトカとは「みつけもの」という意味だそうだが今ではわれらが函館に優るとも劣らない素敵な港街に育っていて、たしかに「みつけもの」にちがいない。

今年の8月、私も帆船シンドバット号に乗り組んでこの街に上陸した。

正確には日本海国際ヨットレースに参加するためにそのナホトカ市を訪れた、という訳。朝日に感動し、夕陽に感激し、満天の星空に堀米ゆず子のバッハをききながら三日三晩の航海を続けて到着したのである。

クジラが間近を泳ぐのを見たり、水深3500メートルの日本海小説を用意できるのだが、田尻編集長から「航海記ではありませんよ」と釘をさされてしまった。

ナホトカ市、人口17万人。なにかと話題になる軍港ウラジオストックが近くにある、こちらの方は人口70万人。つまりソビエトの極東における第二の港湾都市がナホトカなのである。

町並みは湾岸に沿った15キロの南北通りに点在している。

北海道大学の飯田教授が30年程まえに訪れた時は草原の中の集落という風情であったというから、多分私達が目にしたアカシアやポプラは都市計画の中でその後植栽されたものなのだろう、町並みはそれら木々の緑の中に美しく配置されていた。

海から訪れるとよく解るのだが、この街は港湾機能を中心に形成された都市である。

海沿いにはクレーンが林立していて、絶え間なく動いていた。

現在大規模な船舶修理工場が4つ稼働していて、活気があるというか、とにかくやかましい。そのほか沿海州のタイガ、や石炭などの積みだし港としての機能もある。

そんなわけで、ナホトカ市民のほとんどは港湾関係

の労働に従事しているか、もしくはその家族ということになる。

そんな人々のためのアパートというのが町並みの大部分を占めてることとなる。

3階から5階建てのものが多く、サーモンピンクとか明るいブラウンとかいった暖かそうな色でペイントされていて、樹の間ごしに見えるせいかなかなか豊かな空間に思えた。

それらに混じり市役所、市民ホール、あるいは映画館、ホテル、駅といった公共建築物が点在するのだがこれらの建築物がとても美しい。

ほとんどがレンガ造りと思われ、コーナーストーンやアーチ型の窓に加えてレリーフなどで装飾が施されていたりする。

特にその色彩なのだが、基調になるのはすべて明るいブルーで統一されていた。

中央の指示なのか、市長の好みなのか解らないが、つまりそんなふうになっているのである。

色を選ぶ自由があったのだろうか。

建物色彩について研究中の元町倶楽部のメンバーとしては大変気になるところだ。

ペンキの塗り跡から過去を探りだそうとする情熱が国家、体制を越えて湧き上がる。

市役所、駅、公衆便所と手当たり次第にはがしてきた。厚く塗り重ねられたペンキはヒビが入り、反り返ったりしてはがすのも容易であったのだ。

今、私の手元にはロマノフ王朝の貴婦人にも似た優雅なナホトカの公共建築物の秘密を語る破片がある。許可なく勝手にはがしてきたものだ。

まあグラスノスチの時代だから問題ないだろうが、いずれ幾層にもなったさまざまなパステルカラーについて報告したい。



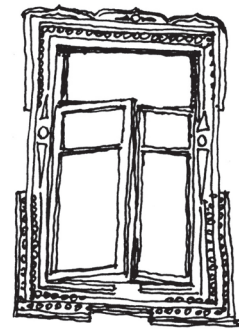
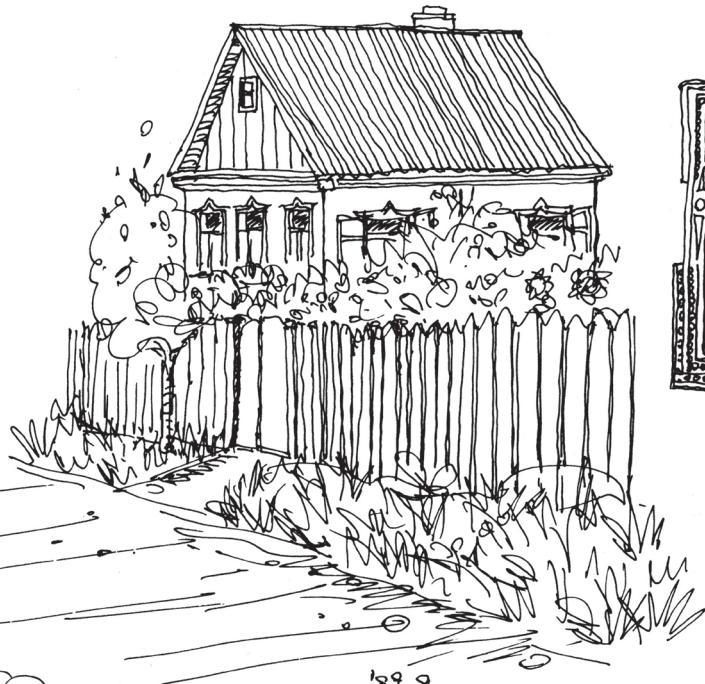
ナホトカ港 待合所。



市役所前の広場。
 ズラーストが在。7バリツチ!
 (ニハにちの同志!)
 と。カメラを向けたウホーズを
 とっくれた老人。
 胸の飾りはバツツではない。



ホテルのBARで
 フット・サックス・ボーカルと
 器用にならしていた。
 ここでロックが人気だった。



美しく装飾された
 窓枠。二重窓で
 ハンキでぬり分け
 られている。



クニヤとカヘリとカ...
 黒い瞳がチャミグだ...

'89.8.

ナホトカ郊外には
 一戸建ての民家が多い。
 緑・白・青ハキで美しく
 彩色されている。

谷地頭小学校校舎を残そう！

谷地頭小学校校舎の保存活用をすすめる会

代表 富岡由夫

1. 谷地頭小学校の歴史

谷地頭小学校は大正12年の創立である。全11年に函館に市制が布かれたから函館市と共にその生涯を歩んできたことになる。この間、昭和21年より北海道第二師範、24年より谷地頭中学校、そして30年から再び谷地頭小学校にもどった。この卒業生は昭和37年がピークで157名であるが、59年は74名、減少傾向は今もつづいている。青柳小学校との統合問題もこの辺から生じている。

校舎について云えば、存廃の危機が二度あった。初めは昭和9年の函館大火である。住吉町より出火した炎は、函館の東半分を焼き盡す大惨事となったが、校舎が樹木に囲まれていたため奇跡的に類焼を免れた。二度目は昭和43年の十勝沖地震である。この時、45年経っていた。崩壊した鉄筋コンクリート校舎があったにも拘わらず、ここは全く被害がなかった。もっともそれまで昭和31・33・36年と土台あげ工事、屋根の張り替え、体育館の床張りなどの修理は施されていた。しかし、37・45年に行われた中庭の整地作業、通学路の舗装工事は土盛りのため、土台の換気孔を埋め建物の老朽化を速めたのは残念である。

現在、北海道には大正期に建てられた小学校が9校残っている。ほとんど僻地の小規模校だが、都市部にあって全校舎3,161㎡当時のまま残っているのは谷地頭小ただ一校である。大正時代の小学校建築の全貌を知る最古の貴重な校舎である。

2. 谷地頭小学校校舎の建築様式について

谷地頭小建築の頃、函館は北洋漁業の興隆期で人口16万人、東北・北海道第一の都市で活況を呈していた。当時、造船業が盛んだったので船大工が多

く、彼らは家大工をも兼ねていた。この時期には、洋風意匠をこらした建造物が多く作られたが、これを可能にしたのは彼らの御蔭である。この時期に建てられた建築として、当別トラピスト(M41)、湯川トラピストチヌ(T2)、元町カトリック教会(T3)、ハリスト教会(T5)があり、学校関係では師範学校(T3)、松風小(T9)、巴小(T10)、常盤小(T11)などがある。校舎は今日、師範学校の一部を除き現存しない。この様な時代背景の中で谷地頭小が建てられたのである。

谷地頭小の全景は周りの樹木のため写真にとることは難しい。まだ、全面に樹木のなかった創立当時の写真①が現在と全く同じ外観である。建物全体は木造素木(シラキ)造りでトタン屋根、練瓦の基礎の上に建てられており、外壁は下見板張りである。小屋根が三つあり中央のが一番大きい。また、見事な胴蛇腹がつけられている。この外観は当別のトラピスト修道院を模していると云われる。詳細に見れば中央玄関の雨よけ屋根はアーチ型で、写真②に見



写真① 〈大正12年建築時の校舎〉

られる様に細工した円板を付している。また、これは複雑な透かし模様の鋳鉄製ブラチットで支えられている。中央小屋根の壁面はアーチ型ウインドウになっており、中央から放射状に飾板が付されている。この窓の下には波形の彫刻板が付いている。全体として波の上に旭日が昇るのを現わし

た図柄になっている。この中央小屋根の作り方は、湯川トラピストチヌ修道院本館玄関の小屋根に非常によく似ている。修道院は大正2年建築なので、おそらく、これに携わった大工がとり入れたのかもしれない。

正面玄関を入るとまず目につくのは広い階段と吹抜けの天井である。階段は途中で踊り場となり、二手に分れて二階の廊下につながっている。この様な

形は大正期の学校建築によくみられる。階段両側の通し柱は二階天井を支えている。ここには写真③に見られる様な柱頭部分の意匠が見られる。天井はすべて竿縁天井で、壁はしっくい作り、羽目板を張っ



写真② 〈中央玄関と小屋根〉

てある。窓や出入口はすべて引き違い戸で頑丈な作りである。窓には安全のため鉄製の柵を設けているが、これには当時の鉄打ちの技法が使われている。ガラス戸には当時のものが残されている様で外部がゆがんで見える所もある。

体育館は木造トラス構造であるが、中央部に採光用の窓があるため作りが複雑になっている。引張部材には丸鋼を用いているのが特徴で、明治の初め山添喜三郎により持ち込まれた洋風建築の技法がここにも息づいている。

建築に携わった技師・棟梁など不明な点が多く、これから調査する必要がある。

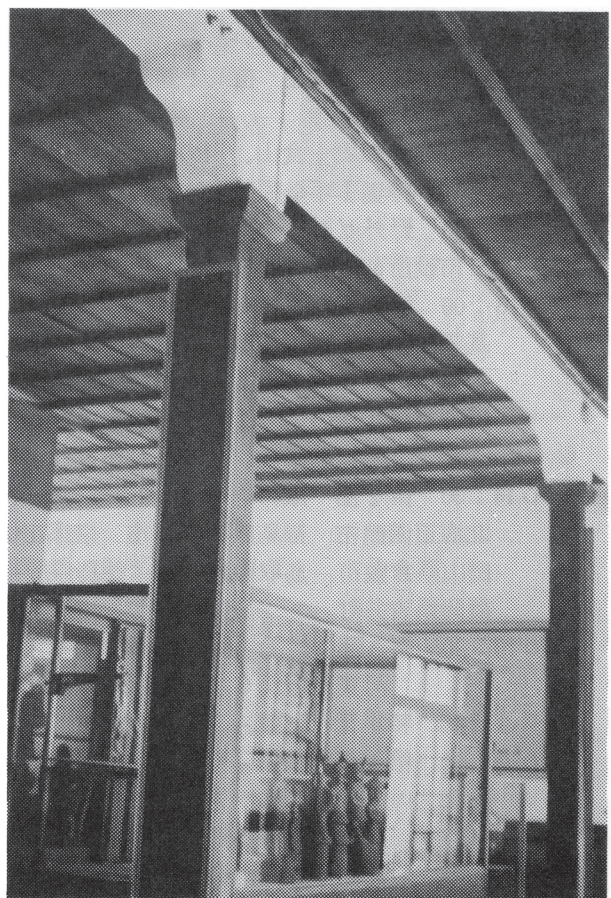
3. 谷地頭小学校校舎の保存活用をすすめる運動

「谷地頭小廃校取り壊しの予定！」が2月13日の新聞にでた。私はここの第14回卒業生なので淋し

い想いでこの記事を読んだ。4月に工芸協会の木村会長より取り壊しを中止して活用できないだろうかとの相談をうけた。しかし、建物は価値がなければ保存の意味がない。歴風会の浜島会長に相談した処、木造校舎は1校位残すべきである。環境的にも谷地頭小は最適である。会としても協力の方向で検討するとの嬉しいお話しである。次いで、この事を谷地頭小同窓会へ伝えたとこ、皆さん大賛成であった。この様にして志を同じくする賛同団体が6月9日創立総会を開いた。現在は15団体である。

6月20日、市長と市議会に陳情書を提出、次いで8月25日、市議会総務常任委員会との懇談会がもたれた。私共は谷地頭小校舎を一部保存し、生涯教育センターとして活用することを提案している。内容は展示室(教育資料室、谷地頭周辺の考古学・歴史学的資料室、植物・野鳥の資料室などなど)、手作り教室(陶芸・木工・織布)、会議室、体育室それに駐車場を設けることである。

残るかどうかは12月議会で決まる予定である。8月16日より署名運動展開中であるが、皆さんの協力を切にお願いする次第である。



写真③ 〈中央玄関の吹抜けと柱頭意匠〉

「第12回全国町並みゼミ」に参加して

主催：全国町並み保存連盟

主催地：栃木市

会長 浜島 国四郎

○10：00 第2部 討論「地方自治体の

役割はいま」

○11：00 閉会式

○12：00 解散 このあとオプションツアー
※(ゼミの諸資料を、利用したい方は、私のところ
にも若干あります。)

I ゼミの概要について

① 趣旨(案内：プリントより)

栃木市は現在人口87,000人の地方都市ですが、江戸から明治にかけて巴波川(うづまがわ)の舟運と例幣使街道(れいへいしかいどう)の宿場町として栄えたおもかげを残し多くの土蔵・石蔵・店蔵・洋館が、町の中心部だけでも400をかぞえています。これらを保存・再生して、誇れる町をつくろうと努力しているところです。

この大会に全国から多くの人々の参加を得て、全国の事例や教訓をここに集め、それがまた全国に広がって行く。何とすばらしい事ではないでしょうか。

② ゼミの日程(次の通りでした)

7月1日(土)

○10：00 受付開始(文化会館ロビー)

○13：00 開会式 ガイド「栃木県と栃木市」

○14：00 各地からの報告

○16：00 分科会

A = 「伝統民家はいま」

問題提起 大河直躬氏(東大教授)

B = 「町並み運動はいま」

問題提起 宮脇 檀氏(建築家)ほか

○18：30 大懇親会

栃木名産の郷土食山、川の幸どっさり

7月2日(日) 特集I「全国蔵の町大集合」

○9：00 野外ゼミ 「蔵の街を歩く」

(市役所前集合。各班に分かれて市内見学)

○13：00 第1部 蔵の町を考える

基調講演「日本人と蔵」

樋口清之氏(国学院大名誉教授)

特別報告「蔵の街づくり・川越市の場合」

黒沢義雄氏(川越市役所)ほか

○14：30 第2部 蔵の町サミット

北海道函館市 福島県喜多方市 京都市伏見

岡山県倉敷市 鳥取県倉吉市 徳島県脇町

福岡県吉井町

○16：00 第3部 討論「蔵の街栃木を考える」

河東義之氏(小山工専助教授)ほか

7月3日(月) 特集II「町並みふるさと創生」

○9：00 第1部 報告「町並み市町村長は

訴える」

田中太郎・長野県坂市長

辻 一幸・山梨県早川町長

和田正美・岐阜県白川村長

II 報告

以上のプログラムの中で、私が参加したものを簡単にまとめます。

第1日：7月1日 分科会「蔵の町を考える」に出
席しました。

A 分科会 テーマ：伝統民家はいま

① 大河直躬先生より

(1) 民家はなぜ、価値があるか。

(2) 日本における民家保存の歩み。

(3) 現在における民家の再生・利活用の形態。

(4) 民家の再生・利活用をひろげるための工夫。

といったことで、日本における民家史の流れと現状について。

② 安藤邦宏先生(筑波大教授)

(1) 民家は地域の財産である。

(2) 木造建築の復興と、民家への視点。

(3) 資源としての木材。

(4) 地域環境としての木材資源の活用。

(5) 伝統技術、専門技術の継承。

(6) 木建を住みこなす。

といったことで、木造建築が見直されつつある中で民家は、今日どんな位置づけをされるのかについてされた。

③ ここでの質疑応答から2、3報告します。

(1) 歴史的なものの、伝建などは時として補修すると形は似ていても、周りとの関係で全く変わったものになることがある。手造りであったものが効率だけでなされた場合に多い。

(2) 木材と殆んど同じ性質の材料ができたと言われるが、性質、性能が同じだと言っても化学製品は、建物としてトータルなものになった時に木材と同じかどうかはわからない部分がある。

(3) 伝建・在来工法とのかかわりで、伝統技術の継承システムについて、木造建築の技術を大事にする。立派な職人さん達を通して、学外教育の取組みを考えた教育システムなど考えてはどうか。等であった。

○16：30～懇親会

会場は人、人で埋まる。

ビール、地酒を飲み、交わりを求め旧交を暖める。笑い話し声の渦巻く中で、私も一人前に大いに飲み食べ楽しんだ。

終了後、保存連盟の幹事会に出席S63年度、会務会計報告・会報についてなどが提案され、可決。次回開催地などは、本部に一任となった。

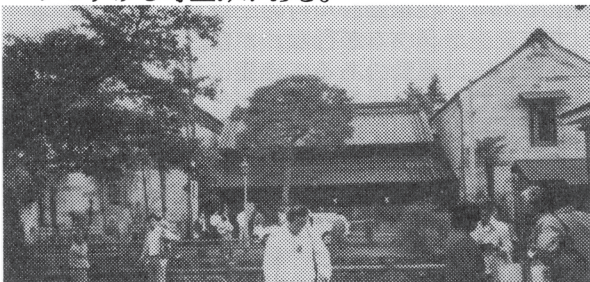
夜は、埼玉の加藤さん、白川村の鈴木さん、神戸の武田さん達4人の若い建築士の方々と私の7人で雑魚寝をする。函館の写真などを紹介したり、まちづくり、伝統技術論などで盛り上り充実したひとときを過ごす。

第1日：7月1日

◇午前中～「蔵の街を歩く」（野外ゼミ）

前夜来の興奮を抱えて雨の街へ……

表通りは、アーケードに視線が押さえられて、ここに蔵造り店舗が並んでいるなどは、余程気をつけないと解らない。しかしその気で見ると成程と、うなずける町並みがある。



一步、裏通り遊歩コースへ入るとさすが、蔵造り建物400戸を数えるという歴史をずしりと感ずる。



本当に素晴らしい「くら」・「くら造り」建物があつた。その構え、技術、材料など本当に素晴らしく一つ一つに感激した。しかし、ふと気付くと小雨だったとは言え日曜日なのに土地の人は殆どいない。店の人だけ、私達だけ、案内された所が観光名所、(見せる場所)だったこともあるかも知れないが、栃木の人はどんな時に、ここに来るんだろうかなど、つい函館西部地区と思い比べてみる。

期待していた巴波川も、その辺りの蔵並みも私の感性の貧しさの故か寂しい影を落としているように見えた。何故だったのか。

栃木では、本来の使われ方を失い見世物化している部分に多く触れすぎた?かも知れない。

触れ方に、もっと別な視点が必要だったのではないかと思っている。

話は変わるが3日目帰路の途中、浜田さんと会津

若松に寄り、貸自転車で一回りする中で見た置屋根土蔵に感激したことが忘れられない。

ここには、在るべき所において生き続けるものの厳しさと美しさ、そしてそれを大事にしている人々の想いと、つき合い方があると、自分勝手な想いに酔ったことを思い出す。

◇13：00～第1部「蔵の街を考える」

樋口清之先生から

蓄えられたものを保管する施設として、3・4世紀頃日本に出現した。から始まり、世界各地の「くら」について、その成長過程・種類・用途・社会的な意味など多面的にわたり話される。

黒沢義男先生から

地域に後継者がいない「空地化」「シモタ家化」、コミュニティの破壊現象がある。旧市街地に高齢者が、外周部に都市の中心が移動、展開というドーナツ現象がある。都市の中心(旧市街地)に若者を引き込み、定住化出来る環境作りが大事。そのために行政、市民が一体となった地域ぐるみの理解と行動が必要だと話される。

(聞きながら、函館のことを思い浮かべる)

◇14：30～第2部「蔵の町サミット」

次の要領で函館の現況を報告をした。

※ 函館には、かなり古くから(1189年頃)和人が住みつき、物流の拠点(1296年頃)だったという記録がある。

※ 郷土史家須藤隆仙先生によると「函館のまち」は「くらのまち」だったという。この事について、市史記録などを、スライドを使って紹介してみた。※ そしてこれらのことを、色濃く残しているといわれる函館山山裾の函館の西部地区を中心に「函館のくら」の現況についてスライドで報告させて頂いた。事前調査での段階で、須藤先生、千代肇先生を始め市史資料室、高田屋嘉兵衛資料館、山内建設社長の山内さん、景観保全課の山本真也さん、函工の豊山、吉村両先生達のご助言、ご協力を頂きながら十分にそれを生かし切れないうちに終わり心苦しく本紙上を借りてお詫びし改めてお礼を申し上げます。各地からは、予め提出された概要により現況報告を主にした発表があり、質疑応答を交わす。◇

◇16：00～第3部 討論「蔵の街・栃木を考える」

河東義之先生外からの報告提言を受け質疑応答、意見交換が行なわれた。

主なものとしては、中心街のアーケード、巴波川の水、それとの関わり方、街路樹、看板等々から、「くら」を単なる展示場や土産物屋、見世物に終わらせてはいけないという。まちづくりとして取り組むべきであるとの確認がなされた。

以上で私の出席した2日間の報告を終わります。

函館に帰って歩いてみる、本当に函館は「くらのまち」なんだと確認している所です。

物置、納屋、雑倉、倉庫、蔵、蔵造り店舗、住居といった形で見ることが出来るが、材料、構法、機能等を含めてみると、そこに函館の歴史、文化、風土、等々が映って見える、そんな気がします。

第12回全国町並みゼミ・栃木宣言

全国町並み保存連盟は、1989年7月1日、2日、3日の3日間、見事な蔵が立ち並ぶ栃木県の栃木市で、第12回全国町並みゼミを開催した。共催組織である栃木蔵街暖簾会をはじめとする地元自治体・関係諸団体の献身的な協力のもと、全国各地で、歴史的環境の保存、整備を通して地域社会の再生・創造をめざす住民・行政関係者・研究者など600人が参加して、熱心な討議を行なった。今回のゼミの特質は日本列島の各地で歴史的景観を構成している伝統的な土蔵や石蔵の存在に注目し、これらを現代都市のなかで、いかにしてよみがえらせ、活用するかという方策について考える「生かそう蔵の街」という特別テーマを設定したことにある。

1日目、開会式は、前回開催地の竹富島住民の伝統舞踊による引き継ぎの儀で開幕した。恒例の各地からの「現地報告」では、切実な問題に直面する、19の住民運動の代表が、報告を行なった。ここでは、かつての「列島改造の時代」にもまさる野放図な開発が、いま再び、全国各地で強行されつつあることが、危機感をもって報告されるとともに、これに対して、住民は快適環境の創造をめざす、いわゆるアメニティの環境観にめぐめて、多彩な運動を展開していることが明確にされた。

つづいて「伝統民家はいま」「町並み運動はいま」の二つの分科会が開かれた。ここでは、歴史的的文化財であると共に生活の場としての民家保存の意義が論ぜられるとともに、わが国の林業の再建をめざして積極的に国産材を使用すべきであることが提起された。また和歌山市では万葉集にうたわれた和歌ノ浦の歴史的景観が、いま巨大な近代橋の建設のため破壊されようとしている事実が報告され、これを契機に、環境の表現体ともいべき景観の価値と、その景観を見つめる住民の目が日ましにとぎすまされてきたことが確認された。

「基調講演」は地元國學院大學栃木短期大学の樋口清之学長によって行われた。「日本人と蔵」と題したこの講演では、稲作農耕の時代から近世までのわが国における倉の種類と用途、社会的意味などが多面的に説明され、「蔵と歴史の大事な証人であると同時に、明日を考える資料となる。明日のために

蔵を保存する運動が必要である」と力説された。

つづいて、「蔵の町サミット」と題して北海道函館市、福島県喜多方市、京都市伏見区、岡山県倉敷市、鳥取県倉吉市、徳島県脇町、川越市および地元の栃木市などの住民・自治体の代表者が、自分たちの町の落ち着いた蔵の風景を誇りにし、大切にしていると語り、蔵と清流そして街路樹など、歴史的環境と自然環境の豊かな地域の創造をめざすことを確認しあった。

また2日目の夜は「町並み、私の研究」と題して韓国人、フランス人研究者などによる外国の町並み保存の実情報告、赤レンガの東京駅駅舎の保全対策、田中正造生家の保存運動などの報告があり、さらに「歴史的景観の文学的哲学的考察」など、運動体験を通じて構築した独自の理論の発表が次々になされた。

3日目は、近年、町並み保存運動に強い関心を示しはじめた全国の自治体を代表して、長野県須坂市山梨県早川町、岐阜県白川村の三自治体の首長が参加して、シンポジウムが行なわれた。そこでは自治体の役割と住民運動のあるべき姿について、住民・研究者たちとともに活発な討議が行なわれた。

会期中、2日目の午前中と3日目の早朝、野外ゼミと銘打って参加者たちは、栃木市内の蔵づくりの町並みを訪れ、巴波川(うずまがわ)べりを歩き、さらに太平山(おおひらさん)の自然を探勝した。また戦後、文化財保護行政の確立に尽力された栃木市出身の作家、山本有三氏の足跡をたどった。雨のなかにもかかわらず地元のボランティアの方々が案内に立たれ、ボーイスカウトの若者たちが交通整理にあたるなど、その真摯な姿は、栃木市の住民たちが、ふるさとの歴史と自然に大きな誇りを抱いている事実を参加者たちに印象づけ、深い感銘を与えた。ここに全国町並みゼミ参加者一同は、今回のゼミに示された栃木市民および自治体の誠意に深く感謝するとともに、栃木市の蔵の町が地域発展の基盤として、ますます充実されることを確信して、上記宣言するものである。

1989年7月3日

第12回全国町並みゼミ参加者一同

事務局だより

- ☆ 6月9日 当会など15団体で構成される谷地頭小学校校舎の保存活用を求める創立総会が開かれた。
- ☆ 7月1・2・3日栃木全国町並みゼミへ当会より会長はじめ5名参加 有意義な研修会であった。
- ☆ 7月6日 市民ホールの早期建設を願う会(仮称)準備会主催による講演会に会より事務局長出席
- ☆ 8月1日 会発足10年を記念し「函館のまちなみ」を発刊した。ご寄稿の皆様へ心から御礼申します。

仲々好評です。ご希望の方は事務局へ 定価1,000円 送料は別に260円かかります。

一読おすすめします!

なお全記念誌の出版記念会も計画しています。決り次第お知らせします。是非ご参加下さい。

●編集後記

原稿依頼の申し出にご快諾いただき、ご多忙のところご執筆下さった皆様へ深謝申します。(田尻)